

デイケア利用者の個々の特性に合わせて作業を個人化し 達成感をもたらす作業プログラム実施方法の伝授過程

大島 千佳^{1,a)} 石井 弓子² 町島 希美絵¹ 阿部 ひとみ² 細井 尚人² 中山 功一¹

概要：重度認知症患者デイケア「ゆずの里」で行われている作業プログラムは、利用者が達成感を得られるように、作業を個人化する。そのために、利用者の身体的・認知的機能を、作業の様子から観察し判断している。本稿では、この「ゆずの里式作業プログラム」の特徴を示すとともに、他施設で試行する過程で見えてきた課題を示す。スタッフは、どこを観察し、何に気付くべきなのか容易にはわからない。そこで、振り返りの時間に、まずはリーダーが利用者の様子を具体的に質問することで、スタッフが着眼点を学ぶ支援が必要だと考えられた。

キーワード：認知症，色塗り，振り返り，気づき

A Process of Instruction How to Personalize Occupational Program According to Individual's Characteristics at Day-care Facilities for Getting a Feeling of Accomplishment

CHIKA OSHIMA^{1,a)} YUMIKO ISHII² KIMIE MACHISHIMA¹ HITOMI ABE² NAOHITO HOSOI²
KOICHI NAKAYAMA¹

1. はじめに

高齢者の増加とともに、要介護など認定者数は、616.4万人にのぼっている。そのうち、居宅サービス受給者数は、390.1万人である（平成27年9月報告）[1]。居宅サービスのうち、食事や入浴など日常生活のケアを中心に、レクリエーションなどのサービスが受けられる「通所介護（デイサービス）」の受給者数は、平成27年7月の1ヶ月間で、186.5万人にのぼった。リハビリテーションが中心の「通所リハビリテーション（デイケア）」の受給者数は、同じ期間で55.5万人であった[1]。多くの高齢者が、日々、介護施設を利用していることがわかる。

しかし、施設の利用者が必ずしも楽しく生き生きと生活しているわけではない[2][3][4][5]。施設側は、レクリエーションや作業療法等のプログラムを通じて、身体的な機能の回復や社会的な適応能力の向上を目指すとともに、利用者を楽しませようと努力する[6]。しかし、利用者全員という集団に対して行われるレクリエーションでは、一部の利用者にとっては「やりたくないもの」であり、意義が見いだせず、通所拒否につながるケースも多い。

重度認知症患者デイケア施設「ゆずの里」では、利用者の通所拒否はほとんど問題にならず、多くの利用者は「仕事へ行く」という意識で通所し、生き生きと活動している。その要因の一つに、「ゆずの里式作業プログラム」が挙げられる。利用者に対して一律に作業プログラムを提供するのではなく、個々の利用者の身体・認知的機能や、残存能力を判断し、利用者が作業を通じて、達成感を得られるプログラムを提供している。個別に提供することで、認知症の行動・心理症状が緩和することが知られている[7]。一般的

¹ 佐賀大学大学院工学系研究科
Graduate School of Science and Engineering, Saga university, Saga, 840-8502, Japan

² 社会医療法人社団さつき会 袖ヶ浦さつき台病院
Sodegaura Satsukidai Hospital, Sodegaura, Chiba, 299-0246, Japan

a) chika-o@ip.is.saga-u.ac.jp

な作業療法は、「リハビリテーション」「訓練」に位置づけられ、指先を使う能力、手や腕の運動機能、高次脳機能の向上、そして日常生活動作の向上を目的とする。一方で、ゆずの里式作業プログラムは、重度認知症の利用者の、身体・認知的機能などの残存機能を維持するという目的はあるものの、利用者が生きがいを持ち、精神面の安定を図りつつ、認知症の行動・心理症状を緩和し、利用者にとってデイケア施設が「安心できる居場所」となることを目指している。

これまで我々は、ゆずの里式作業プログラムの実践と経験を積んだベテランのスタッフ（以下、「ベテランスタッフ」と呼ぶ）が、各利用者に達成感が得られる作業プログラムを提供する過程を分析してきた [8]。ゆずの里式作業プログラムを実施したいという他施設のために、我々はこの作業プログラムを他施設に伝授するための準備を行い、現在、試行中である。本稿では、その試行にいたる過程や、他施設での試行から、「準備、実施、振り返り」という手順の循環や、言語化しきれないスタッフの「知」の育成という観点から、情報科学による作業プログラム伝授への支援方法について議論する。

2. ゆずの里式作業プログラム

2.1 作業の環境

「ゆずの里 *1」は袖ヶ浦さつき台病院に併設された医療保険適用の、重度認知症者デイケア施設である。利用には、認知症専門医の診断が必要である。利用者の健康状態に配慮しながら、医師、看護師、作業療法士、介護福祉士、精神保健福祉士などがチームとなり認知症ケアを行っている。

ゆずの里の作業プログラムの時間は、利用者の人数に応じて4台程度の大きなテーブルが、島形式で配置される。スタッフは毎日、開始前に各利用者の作業内容や、利用者間の相性をもとに席の配置を決める。図1に示すように、各テーブルには、担当のスタッフがついており、各自の仕事をしたり、利用者と同じ作業をしながら、利用者の取り組みの様子や安全面や疲労感に気を配っている

最も特徴的な点は、図2に示すような、スタッフの声掛けであろう。一般的に他の施設で行われる作業療法では、利用者には何らかの機能の向上や維持が目的であることを告げて、作業を継続してやり遂げることを目標に声掛けをする。場合によっては、人員不足もあり、利用者にはほとんど声を掛けないこともあるという。一方でゆずの里のスタッフは、作業の導入で、季節の話や家族の話から入り、「お手伝い」「お仕事」として作業してほしいことを丁寧にお願いする。これにより、利用者は自分がスタッフや家族などの誰かの役に立っているという意識（自己効力感）が芽生え、作業にも入りやすい。スタッフは、作業中にも随時、声掛



図1 同じテーブルで一緒に作業するスタッフ



図2 作業中の声掛け

けをすることで、利用者の身体・認知的機能や精神的な状態、好みやこれまで経験した仕事の内容を把握する。さらに、利用者が「これでいい」と思う完成度から、一段上の表現方法ややり方を教えることで、作品の出来栄が上がり、利用者の達成感の向上にもつながる [8]。

2.2 色塗り

ゆずの里では、数々の作業が準備されている。道具（ハサミや定規）を使う作業や、束ねる・つぶす・入れる・切る・貼る作業など、手先を使う「手作業」や、洗濯物たたみなどの「家事作業」がある。しかし、新規に施設を利用する人は、弱視や色盲などの視力障害がなければ、初回は見本を見ながら下絵に色塗りをする。その利用者にとって、色塗りが適切な作業と判断されれば、それ以後の利用時にも色塗りが、取り組み可能な作業として提供される [8]。

8月はお盆の絵、9月はお月見の絵というように、季節感がある題材の見本（手本）を使用する。図1に示すように、色が塗られている見本、利用者が色を塗る下絵のどちらも、絵の枠はあえて太くする。それにより、多少、色のはみ出しでも、絵手紙のようなできあがりになり、見栄えがする。また、認知機能が低下している利用者が、「花」「葉」など絵の内容を認識しやすいように、構図や各パーツ

*1 <http://www.satsuki-kai.or.jp/kanjya/reha0102.html>

の大きさ、細かさなどにも非常に配慮している。スタッフは、各月、絵の複雑さや構図により数種類の見本を作成し、利用者の認知機能や視覚機能により、適切なものを選択する。下絵の大きさは基本的に B4 サイズであるが、集中力や体力に応じて、B5 サイズに変更することもある。逆に、色塗りの経験や手先の器用さ（巧緻性）が良好な場合には、スタッフが、重ね塗りや色の濃淡の付け方などをやってみせることで、出来栄を上げている。

2.3 スタッフが観察・判断していること

色塗りの作業時に観察し、判断している^{*2}ことを項目としてまとめた。本節ではその概要を示す。あくまでも、利用者が達成感を得られる作業を見出すための観察の項目であり、作業能力や出来栄を点数化して評価するためのものではない。

色塗りは、1. 見本を見る、2. ある箇所と同じ色の色鉛筆を探す、3. その箇所に塗る、という3工程から成る作業である。各工程の様子から、利用者が色塗りに行う意味や工程を理解しているか確認する。利用者が色鉛筆を持つ様子や、下絵の色付けの具合から、利用者の握力・筆圧・巧緻性を確認できる。利用者の視線や、色の塗り方、見本の色と選択する色との違いから、視覚機能を判断できる。また会話中、スタッフが指をさした方への視線の向け方も重要な判断材料になる。利用者へ声を掛けて、その反応を見ることで、利用者の聴覚機能を判断できる。さらに、利用者の疲れや集中力を、姿勢の崩れや疲れの訴え（体の疲れ、目の疲れ）から判断する。利用者によっては、集中度が高く、短時間で疲れてしまうこともある。

利用者から「わからない」「やりたくない」「やめたい」といった不安や混乱、イライラと思われる発言が出た場合には、スタッフも一緒に作業を行うようにして、様子を見守る。しかし、改善する様子もなく、興味ももてない場合には、無理をせずに作業を中断し、他の作業を検討する。これは、ゆずの里式作業プログラムが、定めた作業をやり遂げることを目的とするのではなく、個々の利用者が達成感を得られる作業を提供し、利用者にとって施設が「安心できる居場所」になることを目指しているからである。

2.4 実施手順と作業の個人化

ゆずの里では毎日、作業プログラムが実施される。図3に示すように、「準備」「実施」「振り返り」が毎日繰り返される。「準備」では、各利用者に対して個々の作業を計画し、物品の準備や環境を整えるとともに、スタッフ間で各利用者への対応の仕方やリスクなどを再確認して、実施をイメージするというウォーミングアップ的な時間でもある。「実施」では前述したとおり、各利用者に合わせた作業

を提供し、各スタッフは適切に声掛けをしながら、利用者の作業を観察し、状態を判断する。そして「振り返り」は、利用者が帰宅後に、スタッフ間でミーティングの時間を持ち、各利用者の担当スタッフは、それぞれ観察・判断したこと、気づきを振り返って発表し、それに対して、他のスタッフはその利用者の様子を振り返りながら、より適した作業プログラムについて議論する。

次の作業プログラムは、数々の作業の中から選択し、さらにアレンジすることもある（作業の個人化）[8]。たとえば、「紙玉仕分け」と呼ばれる作業がある。これは花紙をまとめて作られた、親指大ぐらいの、4色程度の紙玉を使う。異食のある利用者には適していないが、一色ずつ、所定の袋や容器に入れる。視覚障害や認知機能の低下により、色で仕分けができない利用者には、ペットボトルに紙玉を入れる作業（「紙玉入れ」と呼ぶ）にアレンジする。ペットボトルの穴から指をいけると、満杯になったことがわかるため、利用者は達成感を得ることができる。また、集中力により、ペットボトルの大きさをアレンジする。

3. ゆずの里式作業プログラム伝授のための手引き

3.1 手引きとなるシート類の作成

他施設に提供するシート類を作成した。なお、ゆずの里では、ベテラン・スタッフは観察・判断すべき項目や、自分たちで開発してきた数々の作業について理解しているため、これらのシート類のすべてを使用しているわけではない。しかし、各利用者の各利用時の振り返りや計画を示すシートは、同様のものが存在しており、随時利用している。

3.1.1 ゆずの里の理念

ゆずの里のリーダーに、ゆずの里の理念について文章化してもらった。やり方をどんなに説明しても、それを実行する目的や理念が理解できない限り、伝授はできないと考える。作業プログラムの目的を示すために、図4を作成した。スタッフの介入が、どのように利用者の意識や気持ちに働きかけ、結果として、利用者がどのように変化するかというモデル図である。さらに、図3に示したように、作業プログラムは準備、実施、振り返りから成り立つことを示す図を準備した。

3.1.2 作業一覧表

代表的な14種類の作業の内容を示した一覧表を、ゆずの里のベテラン・スタッフの協力を得て作成した。各作業の名前に始まり、1. 作業の内容、2. 作業の工程、3. 工程数（難易度の推定に役立つ）、4. 使用する道具、5. 観察のポイントとリスク対策、6. 作業のアレンジ例、7. 特記事項から成る。

他施設のスタッフ（以下、「スタッフ」と称す）は、この一覧表の中から、まず色塗りの作業について読む。色塗りを終えたあと、利用者の状態を他のスタッフと共有しながら

^{*2} スタッフは色塗りに限らず、どの作業でも作業中の様子を観察し、様々な利用者の状態を判断している。

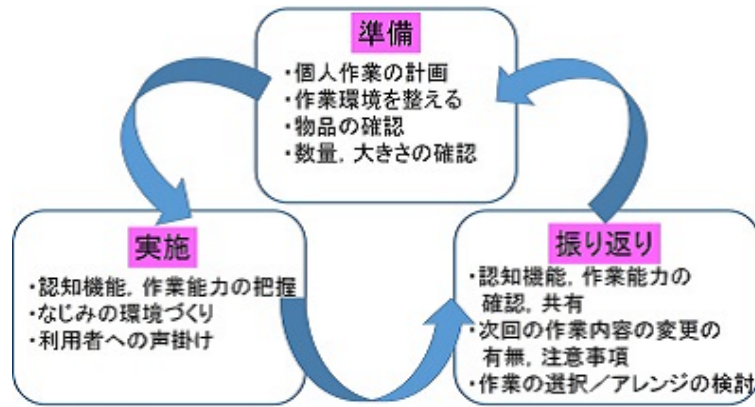


図 3 準備, 実施, 振り返りの繰り返し

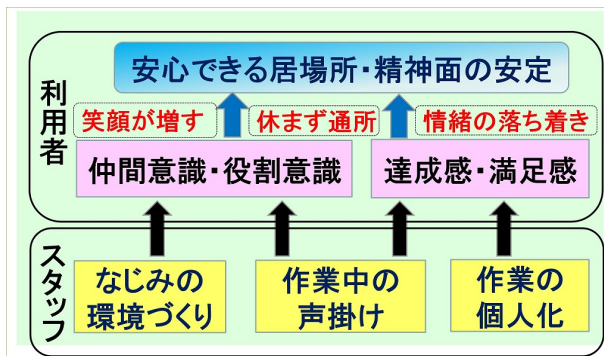


図 4 施設が「安心できる居場所」となるまでの流れ

ら、作業を変更する場合には、一覧表をもとに検討する。

3.1.3 作業の様子シート

その利用者を担当するスタッフが、作業終了後に記入するシートを作成した。観察した結果やスタッフの判断を示す。1. 全体の作業時間、各作業時間の配分, 2. 作業導入時の声掛けと利用者の様子, 3. 作業への集中度と作業中の声掛け, 4. 特記すべき作業中のエピソード, 5. 作業の仕上がりとそれに対する利用者の反応, 6. 作業終了時の利用者の様子, 7. 今回提供した作業の継続または再考の判断, の7つの項目から成り、A4サイズ1枚のシートである。各質問項目には、回答例を示すことで、回答しやすくした。

3.1.4 振り返りミーティングの流れ

振り返りミーティングでは、各利用者の担当スタッフによる報告、スタッフ間で利用者の状態を共有、作業環境や内容の検討、注意事項や対策の確認などを行う。その詳細を示すとともに、参加するスタッフやリーダーの心得も文章化してシートに示した。

3.1.5 利用者シート

利用者シートは、1人の利用者につき1枚準備しており、各作業プログラム実施日の、担当スタッフ名、作業内容、作業の様子を記載する欄があるとともに、その前の回のミーティングで共有した利用者の状態や、考慮すべき点、注意事項や対策を記載する欄もある。6回で1枚のシートになっており、利用者の変化が一目瞭然であり、作業内容

の偏りにも気づきやすい。また作業中の特記事項を記載しておくことで、リスク回避にも効果があると期待する。

3.2 手引きと「知」

様々なシートを準備したが、初めて作業プログラムを実施するスタッフには、理解しきれない部分があることは容易に想像できる。ゆずの里には、多くの経験により育まれた個人の「知」や、スタッフ間でミーティングを重ねながらお互いの「知」を融合させてきた集団の「知」が存在している。しかし、他施設のスタッフにとっては、このような手引きがあることで、着目すべき観点がわかり、ゆずの里式への理解も早くなると期待する。

判断項目の中には、「利用者が色塗りを行う意味や工程を理解しているか」という項目がある。認知症である利用者が、見本を参考にしながら、適切な色鉛筆を選択して、下絵の該当箇所を塗れたときに「理解している」とする。利用者がそれ以外の行動をしたり、色塗りをしないならば、意欲や興味も加味して、認知機能がどのような状態であるかという判断につなげなければならない。多くの事例を見てきた、ゆずの里のベテラン・スタッフならば、その状態を観察することでかなり絞った判断が可能である。

また、たとえば「色塗りについて興味や関心があるか」という判断について、色塗りを説明してもなかなか開始しないからといって、即、「興味や関心がない」と判断するものではない。ベテラン・スタッフならば、利用者に声掛けを続けながら、視覚・聴覚機能や、説明を理解する能力などを確認し、利用者が他に気になっていることがないか、話の中から推測していく。これまでの色塗りの経験や、恥ずかしさなどの気持ちもくみ取り、状況によってはスタッフが利用者の下絵に、色塗りを始めることもある。これも、ベテラン・スタッフならではの判断に至る過程であり、様々な角度から利用者の状態を把握している。

振り返りミーティングや、作業中にリアルタイムに行われる作業の個人化（選択やアレンジ）は、作業中の様子から観察・判断する過程と、判断したことから作業を個人化する

る過程の二段階の判断から成る。現場では、前者には「感性」が必要であり、後者は「直観」だという。共に、多くの経験から育まれた「知」によるものであり、その判断に至る理由を言語化することは容易ではない。

4. 他施設での試行

4.1 協力施設

千葉県内にあるデイサービス施設が、ゆずの里式作業プログラムの試行に協力する。利用定員は1日45人で、ほぼ満員の毎日である。入浴や食事の提供のほか、個別対応のリハビリテーションを全員に行うという特徴がある。その待ち時間には、個々の利用者の好みに応じて、カラオケ、麻雀、手芸、塗り絵などの趣味活動が取り入れられている。最近、認知症者の利用者が増えてきたが、趣味活動に意欲を示さない状況があり、その改善策として、ゆずの里式作業プログラムを試行する。

1 部屋が非常に広く、テーブルはスクール形式に並んでおり、利用者同士は対面して座っている。

4.2 倫理的配慮

本研究を行うにあたって、調査協力施設に研究の主旨とプライバシーの保護について説明し、同意書による承諾を得た。施設や利用者の判断で調査を中止、または得られたデータを破棄できることを説明した。

4.3 試行の目的

仮説は、ゆずの里式作業プログラムを試行することで、利用者の意欲などに変化が起きて、スタッフの作業プログラムへの取り組みや、ケア全体に対する意識が変わることである。さらに、ゆずの里式作業プログラムの伝授の要件を明らかにして、他施設でも試行できるための準備を行うことも目的とする。

4.4 方法

協力するデイサービス施設の施設長に、著者からゆずの里式作業プログラムの説明を行う。3.1節で示したシートを譲渡する。認知症の利用者に、趣味活動の一環として、作業を行ってもらう。初回は全員、無理がなければ色塗りを行う。初回、3回目、1ヶ月半後など、数回にわたり、ゆずの里のベテラン・スタッフVと著者がデイサービス施設を訪問し、作業の様子を観察するとともに、一緒に振り返りを行う。

3名の女性の介護スタッフが本試行に協力する。そのうちの1人、スタッフAは、現場でのリーダーである。

4.5 結果

利用者の作業の様子は、次の執筆の機会に譲る。本節では、2回の作業終了後、ゆずのスタッフVと著者が訪問し

たときの振り返りと、Vからの助言の一部を示す。

スタッフAは、ある利用者の作業の様子から、「自分でやったという感じ（達成感）を得ていたかわからない」「作業が終わっていないけど、本人が“これでいい？”と終わらせている」という振り返りをした。これらについてVは、作業の導入（利用者への作業の振り方）について、「動機づけが増す声掛けをしていたか」という視点で、振り返るよう提案した。「やらされる」という意識をもたせる声掛けではない。この作業により、職員が助かる、おうちの人が見て喜ぶという可能性を示唆し、やる意味をもたせる声掛けが重要である。

またスタッフAは、別の利用者が色塗りが完成する前に終わらせようとすることに気が付いた。Vによれば、その状態が“本人の中では”完成している状態だということ。これは、義務的にやらされている感があることも要因の1つである。この先、本人が嫌がっていないければ、スタッフからの声掛け次第で完成度を高めて、達成感を得る状態に仕上げることができるという。「ここも塗ってしまいませんか」「おうちに持って帰って自慢できるように完成させてしまいませんか」といった声掛けが効果的である。

次にVは、毎日のスタッフ間の振り返りの様子について尋ねた。協力施設はゆずの里よりも1日の利用者数が多く、スタッフも正規雇用のみならず、開始と終了時刻が決まっているパートの人たちがいる。そのため、引き継ぎが昼に行われている。引き継ぎ時、リハビリや入浴については、スタッフからは出来事や気づいたことを積極的に発言しており、記録も行っていた。一方で作業プログラムについては、引き継ぎの時間にスタッフから話題に出ることはほとんどなく、記録はスタッフAや看護師が主に行っているのが現状である。

さらにVは、作業プログラム実施前の準備の様子について尋ねた。スタッフAからは、「先に見本と前回の作品を利用者に持っていき、見本を選んでもらう間に画材を準備している」という過程を説明した。しかし、Vからは「準備」とは道具の準備のみならず、スタッフ自身のウォーミングアップが重要であるという説明があった。ゆずの里では、各利用者の担当スタッフをあえて毎回替えている。その日の朝に、前回の作業の様子を記したシートを使って、利用者の疲労の度合い、作業に対する喜びや達成感の様子、良かったと思われる「声掛け」の内容、作業時間（休憩を入れるタイミング）など、スタッフが気をつけた方がいいポイントを確認し、様子をイメージするというウォーミングアップを行っている。

4.6 考察

今回、初めて他施設でゆずの里式作業プログラムの実施を試みましたが、ゆずの里ならではの手法を伝授するには、まだ多くの支援が必要であることがわかった。これはこの施

設に限った課題ではなく、今後、ゆずの里式の試行に手を挙げている他施設でも同様の課題があると考えられる。

作業終了後に記入するシートを提供したが、記入しているのはスタッフ A のみであった。まわりのスタッフに各利用者の様子を聞いて記入しているものの、ほとんどスタッフ A の気づきに留まっている様子だった。

また引き継ぎ時に、スタッフらはリハビリや入浴については発言するものの、作業プログラムについての発言はほとんどないということであった。

これらの様子から、「準備→実施→振り返り」の作業手順がうまく循環していないことがわかる。まず「実施」の後に各スタッフが気づいたことを記入することが、振り返りの第一段階となる。協力施設に再度訪問し、実体を調査する必要はあるが、スタッフらが、作業プログラムに関して気づいたことを記入できない理由を考察し、下記に挙げる。

1. 気が付いたことを記入する意義が共有されていない。
これまでこの施設での「作業」とは、リハビリや入浴の待ち時間に、楽しく行う趣味活動であった。そのため、ゆずの里式のように、作業を個人化するために、利用者の作業中の様子を観察して判断するということの意義が伝わっていない可能性が高い。
2. 何を観察し、判断すればいいか (2.3 節) わからない。
作業プログラムについては、観察/判断する内容がスタッフ間に伝わっていない。何を書いたらいいのか、どこに視点を向け、どんな場面を書くのかがわからない。今回の試行にあたり、チェック項目をシートに表して渡したが、これらを各自が読んでも、実際に観察することは難しいのかもしれない。
3. 2.3 行にまとめて書く作業に不慣れである。介護の現場に限らず、目の前で起きたことや、それについての自分の考えや判断した内容を、短くまとめて書く作業は意外に難しい。今回の場合には、作業プログラムの様子を記入する経験がほとんどない状況である。経験を積み重ねると書けるようになるが、最初は他者による支援のもと、気づきを言葉や文章にすることに慣れる必要があると考えられる。
4. 書く時間がない。協力施設は、日々の利用者が多く、スタッフの人数に余裕はない。作業プログラムの後は昼食になるため、スタッフらは休む間もなく、配膳の準備をする。その隙間の時間で記入することは難しい。また、パートの職員もおり、勤務時間を延長して記入することはできない。
5. ファイルを出して記入することが煩わしい。協力施設に限らず、多くの施設では利用者個々にファイルが準備され、情報がたまっていく。作業終了後の隙間時間に分厚いファイルを棚から出して記入することは、スタッフらには煩わしいことと予想する。

5. 議論：作業手順を循環させるための支援

本稿の執筆後にあたる、試行開始 1 ヶ月半後に、ベテランスタッフ V と筆者は再度、協力施設を訪問する予定である。それまでに、作業手順を循環させるために、まずはスタッフらが記録する習慣と、何を観察/判断したらいいか学ぶ機会を作る対策を立てることになった。

タブレット型端末により、現場で気づいたことや写真を申し送りとして入力し、スタッフ間で共有できるアプリケーション [9] は開発されている。しかし、スマートフォンやパソコンに不慣れなスタッフにとって、入力することは敷居が高い。それに合わせて、今回の場合には作業プログラムに関する記録を書くことにも不慣れな状況であるため、さらに難しい状況となる。また、介護の合間に、端末に文字入力することは難しい。常に利用者から何らかの要望があり、次々に仕事がある中で、利用者から目を離すスタッフが増えることは良い状況とはいえない。さらに、スマートフォン型の端末を触っていると、利用者やその家族からはプライベートなことをしていると勘違いされることもあるという。

一方で、音声で気づきを入力するシステム [10] も開発されている。ヘッドセットとスマートフォンを装着し、気づきをマイクに向かってつぶやいて記録するが、つぶやきの最後に「よろしく願います」とつけるとスタッフ全員に音声配信される。これならば、文字入力をする手間がなく、介護施設のような忙しい現場でも利用できると考える。しかし、本稿の協力施設のように、作業プログラムにおいて、観察/判断する内容が把握されず、気づきを言語化することも容易ではない状況では、自らマイクに向かって発言することはかなり難しい。

そこで、支援の第一段階として、情報技術は利用せずに、本研究の対象となっている 3 名の利用者ごとに、A4 サイズのホワイトボードを準備する。時間を取らず、片手でも記入できる簡易な方法にする。記録されたものは、スマートフォンによる撮影で保存する。どちらかに丸をつけるだけの、選択肢形式の問いを 3 つ以内と、何か一言付けなくなったときに書けるスペースを設けたフォーマットを準備する。これにより、スタッフらが作業プログラム終了後に記録する習慣をつけてもらうことを目指す。

次に、スタッフらが観察/判断する内容を学び、気づきにつながるように、リーダーであるスタッフ A が 2.3 節で示した内容の詳細を理解し、昼の引き継ぎの時間に、担当スタッフに対して、必ず質問をしてもらうようにする。つまり、リーダーから「聞かれること」はスタッフが「確認すべきこと」になる。ゆずの里のスタッフは、「はい/いいえ」で答えられない微妙な気づきを次に活かしているため、最終的には、各スタッフが 2.3 節の内容を、気づけるよう

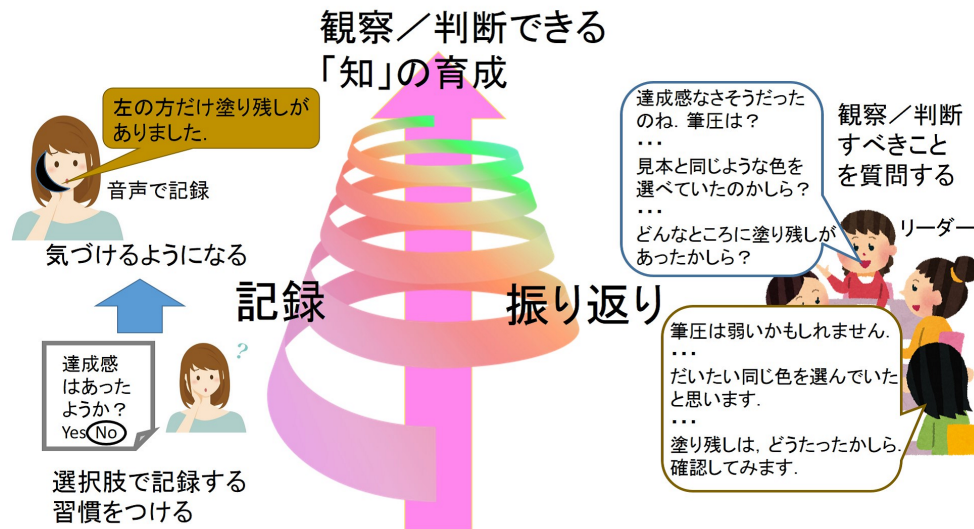


図 5 観察／判断できる「知」の育成

になることが目標である。図5に示すように、スタッフが記録と、スタッフ間の振り返りを繰り返すことにより、観察／判断できる「知」が育成できると期待する。

6. おわりに

本稿では、重度認知症者が意欲的に参加しているデイケア「ゆずの里」の作業プログラムを紹介し、その方法を他の施設へ伝授する過程を示した。他施設での試行は1ヶ月に満たないが、スタッフ側の「準備→実施→振り返り」の作業手順における課題が見えてきた。

将来は、気づきを音声入力により記録し、手を煩わさずに振り返りミーティングができるように情報技術による支援を行っていく。

謝辞 ゆずの里式作業プログラムの試行にご協力くださった施設に感謝いたします。本研究はJSPS 科研費15H02883の助成を受けたものである。

参考文献

- [1] 厚生労働省:介護保険事業状況報告, <http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/m15/1509.html>
- [2] 大森美津子, 小林春男, 大浦智華他:通所リハビリテーションに通う認知症高齢者のストレスの事例研究, 香川大学看護学雑誌, 11(1), pp.47-55 (2007).
- [3] 山本順子, 堀内ふき, 征矢野あや子他:介護老人保健施設で生活している高齢者の苦痛, 日本認知症ケア学会誌, Vol.14(1), p.303 (2015).
- [4] 中島紀恵子:なぜ, 認知症の当事者研究なのか -認知症ケアの歩みと未来-, 看護研究, Vol.46(3) (2013).
- [5] 千葉京子, 草地潤子:介護老人保健施設における認知症高齢者との関わりで看護学生が対応困難となる場面の特性, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, Vol.18, pp.9-16 (2006).
- [6] 大津美香, 高山成子, 吉川日和子他:介護保険制度による通所系サービス1年継続利用者のサービス内容に対する満足感と関連する要因についての検討, 人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌, Vol.7(1), pp.145-153 (2007).

- [7] Kolanowski, A., Fick, D.M., and Buettner, L.: Recreational Activities to Reduce Behavioural Symptoms in Dementia. *Geriatr Aging*, Vol.12(1), pp.37-42 (2010).
- [8] 町島希美絵, 石井弓子, 大島千佳他:重度認知症患者デイケアにおける利用者の「できる」作業決定までの過程, 日本認知症ケア学会誌, Vol.15(2) (2016). (印刷中)
- [9] 産業技術総合研究所: Dance care, <http://unicus.jp/taxonomy/term/11>
- [10] 内平直志他:「つぶやき」を生かして医療・介護サービスを革新, 問題解決型サービス科学研究開発プログラムプロジェクト, 特集1, 2013.